

62. 益須寺関連遺跡の遺物

位置と経緯

県道大津・栗東線（別称大橋取付道）が国鉄東海道本線と立体交叉する地点を中心にして南北400m、東西300m程の地帯に益須寺関連遺跡がある。この周辺には吉身北遺跡・吉身南遺跡など古墳時代を中心とした集落跡の多いところで、微高地上にこれらの遺跡の立地することがわかる。今回紹介する遺物は守山市教育委員会が宅地造成工事に先立って発掘調査を実施した吉身町字泉海道171番地から出土したものである。従来から益須寺遺跡については議論があり、所在地と性格について諸説があった。今回の調査も益須寺遺跡の確定を意図したものであったが、その内容は正報告に譲るとして、やや特異な遺物について紹介しよう。

なお、遺構については掘立柱式建物、溝が検出され8世紀前半代に求められるものと考えられる。

遺物

出土遺物の種類は土師器、須恵器、施釉陶器、瓦があり、総数2,000点余りに達する。瓦は少量で、施釉陶器も若干の出土である。ここで紹介するのは異風な土器である。

坏(1)

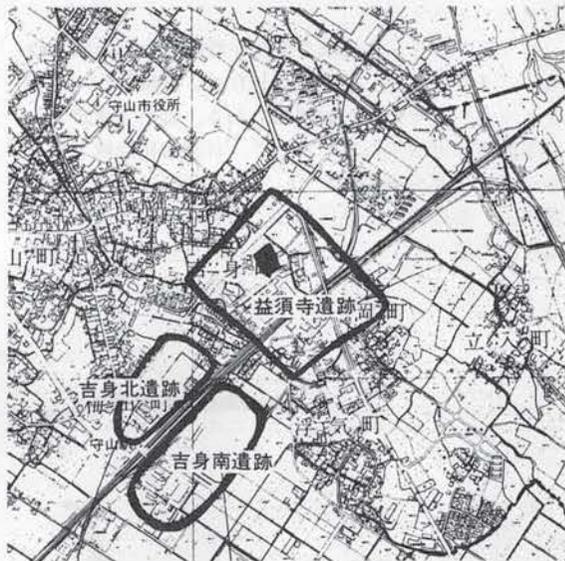
四角形状の高台がはりつけられ、接地面にわずかな凹みが見られる。底部から体部にかけては大きく内彎し、口縁部は外反する。一見、灰釉陶器の碗の体部、口縁部を思わせる形状である。高台の形状、胎土、無釉、色調から須恵器であることがわかる。調整は内外面とも、ていねいな横撫でで仕上げ、色調は灰色というか、かなり白っぽい青灰色である。

蓋(2)

通常、環状つまみ付蓋と呼ぶ坏蓋である。環状つまみ径5.8cm、口径20.6cm、高さ2.0cmの法量である。天井部は篋削り後、ていねいな横撫でで仕上げ、内面は天井部に乱撫でがみられる。胎土は(1)の蓋と同じく、色調も同様である。胎土については、わずかに長石粒の砂粒が混じるものである。

鉢(3)

底部を欠損するが、口径21.9cm、高さはおよそ11.5



遺跡と調査地点（黒塗地点）

cmであろうと思われる。ゆるく内彎する体部から大きく内に入り込む形状で、口縁端部はうすく、上面に浅い沈線状の凹みがみられる。外面は体部全体に横方向に篋磨きがていねいになされており、内面は体部下半に縦及びやや斜め方向に刷毛目が残存している。口縁部内外面はていねいな横撫でで仕上げる。

問題の所在

坏(1)と坏蓋(2)については「陶邑Ⅳ」で第Ⅳ段階第3型式に属するものと考えられており、おそらくセット関係をなすものとされている。法量をみる限りはセットをなしても不思議ではなく、胎土・色調も同様であるので、先ずセットと考えても異議ないところであろう。このことは「陶邑Ⅳ」で報告されているところから泉南地方の産物であろうことがわかる。次に近江での出土例であるが、坏・坏蓋とも他遺跡の報告にはみとめられず、あるいは極めて供給されることが少ないものであったのではなかったかと思わせるようである。環状つまみの蓋は南郷古窯址^①、大津市堂ノ上遺跡^②、服部遺跡^③、近江国衙遺跡^④で、本遺跡出土のそれとはいずれも胎土色調・形状が異なり、やはり南郷古窯址から供

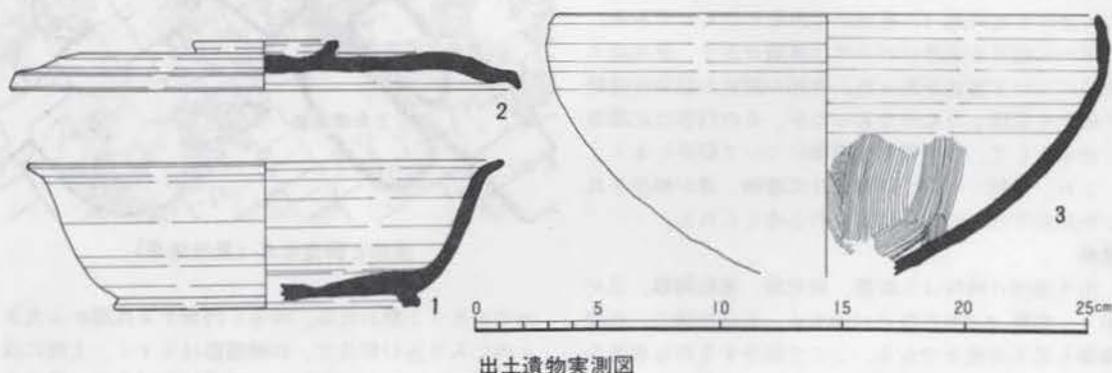
給されたものと考えられよう。

次に、鉢である。この土器の特徴は何といっても内面の刷毛目の残存である。益須寺遺跡ではもう1点出土しているが、体部が欠損しているため刷毛目の存在が不明瞭であるが、外面の調整は極似している。この土器が摺鉢として使用されたとしたら、刷毛目が磨滅したり、部分的に残存度合がかわったりしている可能性があるが、そうではない。「陶邑」の関連にも、この遺物はなく生産地を確定し得ない。やはり近江以外のものであろうか。

さて、このように異風な遺物が整理途中で最低4点あることがわかり、早速紹介したが、最後にこの遺物をどのように考えるかが問題である。益須寺遺跡として本遺跡が周知されているので、日本書紀持統天皇8年の條の一部を掲載すると、「醴泉涌於近江國益須郡都賀山。諸疾病人停宿益須寺。而療差者衆」とあり、都賀山の麓に涌く醴泉の恵みで、病人が療養したことが知られる。どこらあたりから人々が集まってきたか

どうかは判らないが、また益須寺がいつまで存続していたかは確定していないが、広範にわたって症病人が益須寺をたずねてきたであろうことは想像に難くないであろう。今回の出土遺物が8世紀前半代に求められ、遺構が掘立様式建物であることから直接益須寺跡と確定し得ないが、瓦も白鳳期（7世紀後半後葉）から8世紀中頃までの存続で、その周辺に病いの人々が宿れる建物がこれ以降も残っていたかも知れない。泉南方産の坏・蓋セットと産地不明の鉢などをもった人々が次々と益須寺の療養所に集まり、治ゆしていったのではないと思われる。ここでは、異風な遺物を益須寺に療養した遠方の人々の持ってきたものと考えた。あるいは別の考えも成り立つかも知れないが、御批判を請う。(山崎秀二、岩崎茂、清水好洋、山田謙吾)

注(1) 服部遺跡の第一次発掘調査中に出土している。
 注(2) 滋賀県教育委員会保存の土器を観察した。
 注(3) 昭和51年 滋賀県教育委員会「昭和51年度文化財調査年報」



63. <特集>滋賀文化財だより一覧

| 号数 | 発行年月日 | 主 題 | 執 筆 者 |
|----|-------------|----------------------------------|-----------|
| 1 | 1977. 4 .30 | 1. 神崎郡能登川町織山出土の蔵骨器 | 山口 利彦 |
| | | 2. 守山市服部遺跡出土の奉養銭・冥銭と考えられる小型円板の一例 | 兼 康 保 明 |
| | | 3. 草津市観音堂遺跡出土の古瓦を加工した小型円板 | 辻 広志・兼康保明 |
| | | 4. 大津市錦織1丁目水車谷古墳 | 鳥 田 秀 俊 |
| 2 | 1977. 5 .30 | 5. 野洲町久野部遺跡七ノ坪地区調査略報 | 大 橋 信 弥 |
| | | 6. 多賀町梨の木遺跡の木炭椀 | 丸 山 竜 平 |
| 3 | 1977. 6 .30 | 7. 大中の湖西遺跡出土の縄文式土器 | 佐藤宗男・酒井和子 |
| | | 8. 富波遺跡出土の鐻 | 久 米 雅 雄 |
| 4 | 1977. 7 .31 | 9. 長浜市国友遺跡出土の異形土器 | 林 純 |
| | | 10. 湖北地方において最近発見された遺跡 | 林 純 |
| | | 11. 大津市真野小学校保管の木葉形尖頭器 | 勢 田 廣 行 |
| 5 | 1977. 8 .31 | 12. 南市東遺跡出土のへら記号の弥生式土器 | 北 村 彰 |
| | | 13. 高島町中ノ坊遺跡出土の瓦器椀 | 兼 康 保 明 |

| | | | |
|----|------------|--|--|
| 6 | 1977.12.20 | 14. 南郷丸山古墳発掘調査略報 15. 櫻木原遺跡第3次発掘調査抄報 16. 瓦窯出土瓦の示すもの | 松浦俊和 葛野泰樹 林博通 |
| 7 | 1977.10.31 | 17. 守山市播磨田東遺跡出土の石器 18. 守山市寺中遺跡出土の弥生式土器 19. 守山市服部遺跡出土の武器形木製品について | 山崎秀二 山崎秀二 大橋信弥 丸山竜平 |
| 8 | 1977.11.30 | 20. 甲賀郡水口町泉所在の古墳群 | 本田修平・堀内宏司 奥野宗寛・折井千枝子 |
| 9 | 1977.12.31 | 21. 滋賀県下の庄内式土器一畿内より搬入された甕形土器の分布一 | 田中勝弘 田中勝弘 田中勝弘・林純 |
| 10 | 1978.1.31 | 22. 山東町長岡琴岡山裾出土遺物 23. 山東町すも塚古墳の出土遺物 24. 山東町菅江窯跡出土の須恵器 | 水野正好 水野正好 丸山竜平 水野正好 須崎雪博 葛野泰樹 |
| 11 | 1978.2.28 | 25. 大津市滋賀里大通寺古墳群調査概要(1) | 大橋信弥・谷口徹 |
| 12 | 1978.3.31 | 26. 大津市滋賀里大通寺古墳群調査概要(2) 27. 大津市山上町所在部屋ヶ谷(別名水車谷)古墳について | 兼康保明 西田弘 |
| 13 | 1978.4.30 | 28. 埴輪に見る琴の三種の構造 29. 穴太遺跡出土の古式土師器 30. 大津市内出土の白鳳期の須恵器 | 兼康保明・篠原友子 |
| 14 | 1978.5.31 | 31. 草津市志那中遺跡の井戸2例 | 丸山竜平 葛野泰樹 |
| 15 | 1978.6.30 | 32. 比叡山出土の石鏃をめぐって 33. 石山寺蔵重要文化財銅鐸の出土地について 34. 小型円板の新資料 一 大津市南滋賀庵寺、高島郡高島町中ノ坊遺跡、同町構口遺跡一 | 大橋信弥・谷口徹 兼康保明 西田弘 兼康保明・篠原友子 |
| 16 | 1978.7.31 | 35. 栗東町下戸山山田蛭子講南古窯址について | 丸山竜平 葛野泰樹 |
| 17 | 1978.8.31 | 36. 小谷城清水谷発掘調査概報 | 大橋信弥 |
| 18 | 1978.9.30 | 37. 守山市金ヶ森西遺跡出土の有孔円板について 38. 守山市播磨田東遺跡の玉作工房址とその遺物 | 山崎秀二・大崎隆志 岩崎茂・中原秀夫 山田謙吾 |
| 19 | 1978.10.31 | 39. 湖北地方の縄文時代遺跡 | 田中勝弘・宮成良佐 |
| 20 | 1978.11.30 | 40. 新旭町堀川遺跡の現況 41. 滋賀県出土の子持勾玉一南滋賀遺跡出土の子持勾玉から一 | 水口高志 須崎雪博 |
| 21 | 1978.12.31 | 42. 大津市錦織出土の軒丸瓦 | 岡田晃治・永野寿治 新出高久・吉水真彦 |
| 22 | 1979.1.31 | 43. 高島郡高島町鴨稲荷山古墳現状実測調査報告 44. 近江神宮蔵重要文化財白磁水注の出土地について | 葛野泰樹 坂井秀弥 西田弘 |
| 23 | 1979.2.28 | 45. 守山市服部遺跡の弥生前期水田址 | 辻広志・国松千夏 大田智鶴 |
| 24 | 1979.3.31 | 46. 古墳時代後期の竪穴式住居址群一余呉町桜内遺跡一 | 石原道洋 |
| 25 | 1979.4.30 | 47. 八日市市瓦屋寺町所在瓦屋寺瓦陶兼業窯址群について | 丸山竜平 池野保 |
| 26 | 1979.5.31 | 48. 苗村神社楼門の解体調査 | 松浦俊和 宮本忠雄 |
| 27 | 1979.6.30 | 49. 瀬田三丁目字野畑出土の遺物について 50. 信楽町飯道神社の懸仏について | 大橋信弥 谷口徹 |
| 28 | 1979.7.31 | 51. 守山市服部遺跡出土の磨製石剣について 52. 三・四世紀の木製鋤 | 宮成良佐・田中勝弘 |
| 29 | 1979.8.31 | 53. 湖北地方出土の墨書土器 54. 高月町井口遺跡出土の古瓦 55. <特集> 近江出土の銅鐸 | 田中勝弘 葛野泰樹 中江彰 |
| 30 | 1979.9.30 | 56. 安曇小学校保管の道標「石敢当」について 57. 穴太遺跡発掘調査抄報 | 山口政志 長谷川嘉和 |
| 31 | 1979.10.31 | 58. 筑摩祭 | 本田修平・兼康保明 |
| 32 | 1979.11.30 | 59. 高島郡高島町鴨遺跡で発掘された中世の足あと 60. 高島郡マキノ町仏性寺遺跡出土の田下駄 | 山口順子 吉水真彦 |
| 33 | 1979.12.31 | 61. 近江坂本城跡の発掘調査<速報> | |

64. 滋賀県埋蔵文化財センター 開所をむかえて

滋賀県下では昭和40年代を境にして、各種の開発事業が急増し、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査および保存問題が大きくクローズアップされてきた。そこで滋賀県教育委員会では埋蔵文化財専門職員の定員増と調査体制の充実を図ってきた。この間、財団法人滋賀県文化財保護協会の発足と各市町村の埋蔵文化財の専門職員の設置等、より一層の文化財保護と調査体制づくりにつくしてきた。その結果、現在県下で埋蔵文化財に従事する専門職員は30数名を数えるまでにいった。

しかし、現状を直視するとそれぞれの専門員は発掘調査におわれ、また、膨大な資料はそれぞれの現場のプレハブや公民館、仮収蔵庫等に散在的に保管され、十分な研究、資料保存状況ではなかった。そのため、永久に研究資料に堪えうる遺跡・遺物のデータ化は皆無に等しく、将来の資料的価値にまで影響を及ぼしかねない状態におかれていた。

そこで、滋賀県では直面する埋蔵文化財の問題を解消するため、埋蔵文化財の調査研究機関を設置する構想がまとまり、昭和53年12月埋蔵文化財センターの工事が着工され、昭和55年4月1日開所する運びとなった。

滋賀県埋蔵文化財センターは天津市瀬田南大萱町に所在し、県が実施している琵琶湖文化公園都市構想の中心部となる「文化ゾーン」の一画にあたる。

敷地面積は4,100㎡、建物延面積1,990㎡を有し、1階にロビー、相談コーナー、整理室、第1収蔵室（木製品を収容する水槽大8基、小2基、木器保存処理用PEG含浸装置設置）、第2収蔵室（遺物仮保管室）、

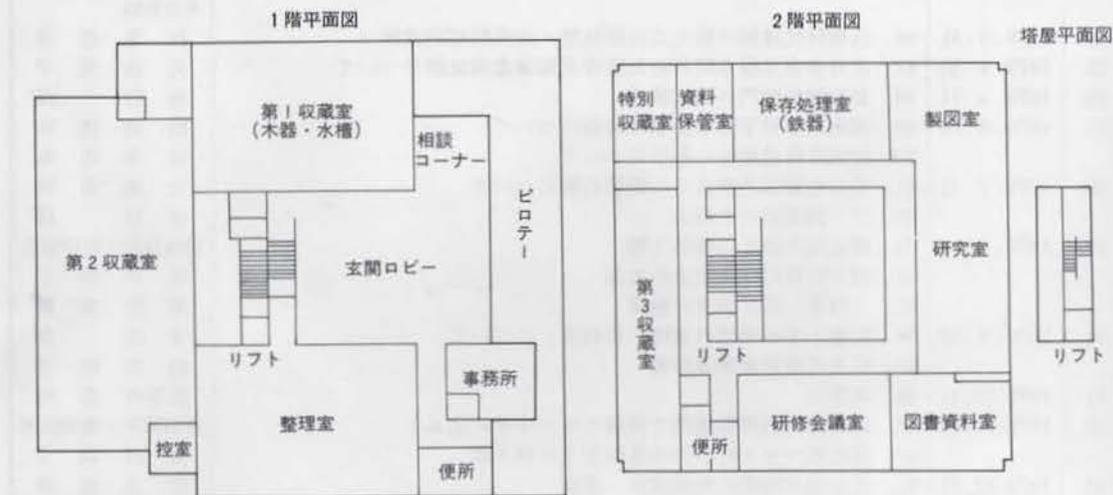
写場（暗室付）等を置き、ロビーには遺物の展示を計画している。2階には保存処理室（鉄器の保存処理）、製図室、研究室、図書資料室、資料保管室（遺構・遺物実測図等）、第3収蔵室（主に遺物の完形品）、特別収蔵室（空調等の必要な遺物）、研修会議室があり、屋上では遺物の自然乾燥が可能なスペースがとられている。

埋蔵文化財の主な業務内容は、大きく①埋蔵文化財の調査・研究、②資料の整理・保管、③埋蔵文化財の啓発・普及の3点を主要な任務としている。具体的には、埋蔵文化財の情報を収集し、分布調査・遺跡の範囲確認を行い文化財の実態を把握し、的確な発掘調査が実施されるよう努めなければならない。発掘調査を実施すれば、関係機関との十分な協議と調査体制の整備をし、遺跡を破壊から守り、重要と認められる遺跡については、史跡として整備・保存を進めるようにしなければならない。

つぎに、発掘調査資料の整理・保管も主要な任務で、遺跡・遺物台帳の整備・マイクロ化、参考図書の充実、鉄器・木器の理化学的処理等資料の整理を行い、県下のデータバンク的任務もある。

これらの成果は広く県民や他の研究者に公表し、埋蔵文化財の普及・啓発に役立てなければならず、図書やニュースの刊行、現地見学会や報告書の作成・講演会の実施等広く情報を提供しなければならない。さらに、より充実した埋蔵文化財の調査・整理を実施するには、専門技術の研修会を実施し常に学界の水準に達しうる研鑽も埋蔵文化財センターの主要な任務である。

埋蔵文化財センターでは、4月1日より県教委の技師をも含めた8名の技師を中心に、市町村、県文化財保護協会の技師・調査員の協力を得、県下の埋蔵文化財の調査・研究に努め、同センターの機能をフルに発揮していきたいと考えている。（葛野泰樹）



滋賀県埋蔵文化財センター平面図